

医療の安全を語る

～ 菅侯弘道・文子～

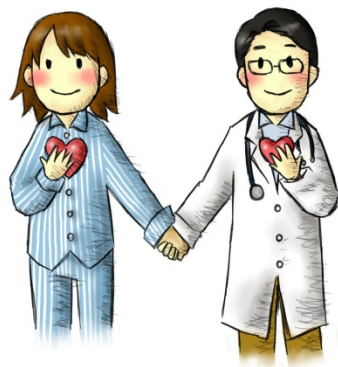
このDVDは、医療事故の当事者の生の言葉に耳を傾けることで医療事故に関するさまざまな問題について考え、これからの医療の質・安全の向上に役立たせることを目的として、医療の質・安全学会「パートナーシッププログラムワーキンググループ」が企画して作成したものです。

語っているのは、2000年4月に起きた医療事故(裏面を参照)で長女笑美ちゃんを亡くした菅侯弘道さん、文子さん夫妻です(2007年1月22日収録)。

医療機関の中や教育機関の中でこのDVDをご覧いただいたら、感じたことや考えたことについてぜひじっくりと話し合ってください。

【話し合っていたきたいこと】

- ・医療事故の被害者の声を聴くことにはどのような意味があると思うか
- ・医療事故後に被害者(患者・家族)と医療者との間に生じがちな壁を作らないために、医療者や医療機関はいつどのようなことをすればよいと思うか



【お問い合わせ】

医療の質・安全学会パートナーシッププログラム
anzenkataridvd@qsh.jp

東海大病院事故と菅侯弘道さん・文子さんの対応についての概要

- ・ 1998年9月、菅侯笑美ちゃん、在胎34週で、東海大学病院で緊急帝王切開手術により誕生。
- ・ 1999年2月、胃食道逆流症による肺炎により東海大学病院に入院。
- ・ 2000年4月9日 8:45 笑美ちゃんを入院当初から担当していた看護師が、鼻から十二指腸までつながっている経管栄養チューブの三方活栓に注入すべき内服薬を、右腕静脈からとられた点滴ルートの三方活栓に誤注入。そのために翌日の10日、笑美ちゃん、永眠。
- ・ 両親である菅侯弘道さん・文子さんは病院からの連絡を受けて病院に到着。すぐに、小児科医師とリーダーの看護師から事故の説明と謝罪をうけた。
- ・ 2001年、菅侯弘道さん・文子さんは、病院が事故直後から事故を認めて謝罪したことを高く評価し、また、賠償額を争う民事裁判は医療事故にはそぐわないと考え、民事裁判を起こすのではなく示談という形で解決をすることにした。
- ・ その後、菅侯弘道さん・文子さんは医療安全の向上のために、各地の医療者向けの研修会などで講演を行っている。

事故当時東海大学医学部附属病院の院長だった谷野隆三郎さんのお話

私たちは事故から4年経った2004年の当院の医療安全セミナーにおいて、菅侯ご夫妻にお話をさせていただきました。これはあれだけ大きな医療事故で、しかも当事者でありながら事故そのものが風化しかねないという危機感があったからです。私たちは、医療事故被害者から直接お話を伺い、貴重な体験を共有することによって初めて、少しでも被害者側のお気持ちを理解することができるのではないのでしょうか。

医療事故は残念ながらゼロにはなりません。それだけに、医療事故から目を背けるのではなく、被害者側のお話を伺い、患者さん側から見た医療事故の真実に眼を向け耳を傾けることは、危機管理意識と再発防止に向けた動機づけを高めるという意味において、その意義は大きいと思います。